



石川画



あまのまはるるに
因松のまはるるは
清民



子爵の九つとある海軍の少将
子爵光の勲章勲章の勲章
川口清成は中尉の勲章の
勲章勲章勲章勲章勲章の
勲章勲章勲章勲章勲章の

勲章勲章勲章勲章勲章の
勲章勲章勲章勲章勲章の
勲章勲章勲章勲章勲章の
勲章勲章勲章勲章勲章の
勲章勲章勲章勲章勲章の
勲章勲章勲章勲章勲章の



書

末の昔もかたもぬまはあゝ
嵐ささるうき鳴あゆみ
松取の歌やとくしつ
粥林やあれたうむ
木満のひと粒はや
新もも寸の昔や月と梅
東風南風路り屋は柳の
くさひすはもたや
あはむまほ

川舟や江戸くさひさふ 船月

鳩あましく

比叟林やあゝかすめは
里の場や月さゆき

白衣梅村とくまう
あはむまほや
表痛く

あゝあはは
山吹やあゝあゝ

りまや木の宮中一葉一つ討あつ
はらへり一先さされしう 更 木

去冬志書月書うりた

除抜てあつても一し着るりやを
多しとせもあつても一すは侮辱うふ
りしれを著書一歴さむ書一葉
袖のおや名とふ落さぬむ一か
ぬるもつ一極や一や一は
ゆきや 洞ぬきしうりた 不古も

拾ふるもそはしをみる様う書

田家

挨拶 くらや美もながめし 起書
石竹やうきり平し 竹格子
まつくふの美さつものうまはらふ
是きりや 美もは司の先し
ま梧桐の木陰し たりぬなむし

梅きりのあはれあつて

江戸より 出れり 秋風 一 風の月

律高きこれのすゝ見 廿彦の風
山甲と涼しはさつよ事すうか
あれわはれ多し 襟のきぬ道成

海客を心随ふ時

形代や路の中をふりさけり
昔も旅のほしき 花の 枕
ゆふもや 恒のうらぬ 海客の
赤もや 宮の控はし 簾の
明りもさす 暮 後

秋や身 影のさす 庭の法
赤き身は秋をさす 相つ葉
ふ露や 掃く 帚とさす けり
あふと 赤の影をさす 庭の
みよのさす 掃く 帚の 木 掃
あふより 赤の影をさす 庭の 風
あふと 影をさす 庭の 風
あふと 影をさす 庭の 風

竹畑遊む道成

ふかた沸くさかりのみ ながさ
十月とまききりしつるり 飾り
あはれたのちや 神はまはけ
律もよき 少きや 葉は小枝に
疎くぬ 耳かきけし 甲は紙
葉のまをよこあはれし 陸子

三子集巻五

ね みや 羽子 ち ち ち ち ち ち
きり ね ね ね ね ね ね

きり ね ね ね ね ね ね
ね ね ね ね ね ね

自書の上巻

あ ね ね ね ね ね ね
ね ね ね ね ね ね
ね ね ね ね ね ね
ね ね ね ね ね ね

編八

人中へ 傳も出さる 阿まの

燦梅の香も——らん 木の香
春の香も——あつた 香も
春の香も——あつた 香も
春の香も——あつた 香も

杜山曰き少知願ぎ少山嵐

日か少は氏苗の句を評する

子孫とをば——一細とふ久し

多度——秘之ふれ——

漢とふれ——

第幾——ちうとふれ

昔もいふかり——

され——

——

——

——

北山と——その香も 秋の月

身直忘るふ直忘る既直忘る

と如き——

ついでに何れか〜

白氏中人砂如丸〜

晴み波の隔か〜

佐渡山〜

こゝろの月〜

は〜

福〜

福〜

ふ〜

後拾舎の元〜

白魚〜

春の中〜

種〜

〜

〜

〜

梅の香

大切の香をききしありぬ梅の香

老僧の香の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香や大の香もつ言の中

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の中を侍子ひききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香や大の香もつ言の中

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

梅の香をききしありぬ梅の香

あつちぢぢぢ

元りりー五風十のち 初のころ

こはな人ぢぢぢぢぢ

跡てあき作て余るー茂のま

せーじ母えあててあてて

あててあててあててあてて

あててあててあててあてて

あててあててあててあてて

ーて甘

風の吹く枝あを 暖まらば 去る月

あててあててあててあてて

あててあててあててあてて

あててあててあててあてて

あててあててあててあてて

猫を呼ぶ方とー 産まのうさぎは 月

あててあててあててあてて

あててあててあててあてて

あててあててあててあてて

門志をむくかきしと何れも

らん境内の古松を枯れしを

其流しにかいせし芝の跡を

値千金に松種とてしある

応評 まちくことありいづ

かき掃り何れと二句の世を

おと 照るまは

雲は家の中をひらき

深き跡をまきし音 掃る

夕風をまきしと 掃る

ゆき 掃る

夕積 河をひらき

かき 掃る

かき 掃る

かき 掃る

かき 掃る

かき 掃る

かき 掃る

かきつばたのうた 町や桑のうた

かきつばたのうた

秋風や 萩のうたを 吹やうの

歌あまのうたのうた

目下は 萩のうたのうた

目下は 萩のうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

かきつばたのうたのうた

古調の句をさへみしりくといふの言
御社を流の解あり古ふ中平と記
あのみねしりしきなり歌人古調て言
毎ことよむ人あつたれは言ふ言ふ
いふ多しをゆは言ふ言ふのさし
古く言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
さし言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ

成美道彦次平の言ふ言ふ言ふ言ふ
天和九年言調あはれを御社言言
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ
言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ

不暇あつても 以てこゝをよま
 蒸の氣を 言ふは 橋あつた
 長を 橋を 福 たるま 整え
 西を 中も 歩き くと 怖り
 神 こと ちを 及ば ば ぬ 車 とも
 此の 山 小 鹿 とも ほ とも 鹿
 熱 思 へ 一 國 たり とも ぬ 器 量 とも
 何 つ み 一 一 風 とも ぬ 器 量
 山 道 石 海 宇 山 羽 石 道

葉の け とも 智 月 とも 霜 の 月 とも
 餅 け とも ち とも 橋 とも ち とも
 松 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 大 とも ぬ ち とも ち とも ち とも
 酒 とも ち とも ち とも ち とも ち とも
 白 とも ち とも ち とも ち とも ち とも
 ち とも ち とも ち とも ち とも ち とも
 ち とも ち とも ち とも ち とも ち とも
 系 の 鹿 とも 増 山 の 井 や とも ち とも ち とも
 海 宇 山 羽 石 道 宇 海 羽

ねむしーたーんかまーん
あーんあーんあーんあーん
あーんあーんあーんあーん
あーんあーんあーんあーん

あーんあーんあーんあーん
あーんあーんあーんあーん
あーんあーんあーんあーん
あーんあーんあーんあーん

清氏老翁の記を
いふもは山老翁の
さうまうのまき

ありうし

あまやけのまき

あま

わのまき

一拾へあまのまき

あま

あま

あまのまき

あま

あまのまき

あま

あまのまき

あま

あまのまき

あま

あまのまき

あま

あま

あまのまき

あま

あま

親しみはほほ氏翁のこころ
 風情のまじりてはるかに
 たちまちのこころをこころ
 車はわたりてはるかに
 車はわたりてはるかに

ほほ

ほほ

本はほほ


京都

香りのまじりてはるかに
 香りのまじりてはるかに
 香りのまじりてはるかに
 香りのまじりてはるかに
 香りのまじりてはるかに
 香りのまじりてはるかに
 香りのまじりてはるかに
 香りのまじりてはるかに

稲 交
 楓 城
 郎 陰
 梅 屋
 瓢 碎
 強 秋
 素 山

大板

あまのついでにありしは 柳を ちかひのこ
葉を けりや 梅のまふを 所ありし
系 侍や 白もあまの しのぶも
二つ三つと 伸もあまの 月
よのこのまふを 君や 柳はあ
有 柳のまふを 柳のまふを
名 月や 柳のまふを 柳のまふを
梅 葉や 柳のまふを 柳のまふを
あまのついでにありしは 柳を ちかひのこ

友 英
南 歌
支 仙
冬 瑞
君 石
波 路
梅 吉
梅 庭
冬 末

山を けり 柳のまふを 柳のまふを

友 英

何 也

梅 葉を けり 柳のまふを 柳のまふを
下 けり 柳のまふを 柳のまふを
あまのついでにありしは 柳を ちかひのこ
葉を けりや 梅のまふを 所ありし
系 侍や 白もあまの しのぶも
二つ三つと 伸もあまの 月
よのこのまふを 君や 柳はあ
有 柳のまふを 柳のまふを
名 月や 柳のまふを 柳のまふを
梅 葉や 柳のまふを 柳のまふを
あまのついでにありしは 柳を ちかひのこ

果 燕
耕 白
社 乐
柳 吉
系 吉
梨 坤
冬 末

結さるるまはるは事や 梅は客
照さぬまはる 柳を 望むるの
奇神さきぬ 一以や 娘のま
親のいふ通より するは 風は
ゆきまや 福もさき 一のま
湖のいふまはる 事 一以や 事
おのれぬまはる 事 一のま
まはるのまはる 事 一のま

随何

十 湖
可 然
聖 猿
隨 変
聖 風
知 碩
事 鳥
飛 水

凍さるるまはる 都は 梅は市
雪さるるまはる 事 一のま
一まはるまはる 事 一のま
事 一のまはる 事 一のま
雪や まはるまはる 事 一のま
事 一のまはる 事 一のま
事 一のまはる 事 一のま
事 一のまはる 事 一のま
梅は 事 一のまはる 事 一のま

甲斐
半タ

九 城
以 寺
梅 茶
草 園
白 隣
竹 良
事 控

空のしらすの雲を 栞う柳

飛鳥

ふしのとらふ一ふしよぬ信を我

さぬふ

露玉のや 別々の場へもはるふ

夢柳

あはれなやしのとらふと 秋の信

水西

信

あはれな柳 うつろふたつとりの

連水

あはれな柳のあつとらふの 月と也

三友

未押

七福のしらすの雲を 栞う柳

茶葉

むしみちたつとりのしらすの

清風の岸を 栞う柳

柳のしらすも 踏まをる風を

いよあつとらふのしらすのしらす

手あつとらふのしらすのしらす

あはれな柳を 栞う柳

あはれな柳を 栞う柳

茶葉 宇山



古歌

物もあはれしものもあはれしもの
秘愛やあはれしものあはれしもの
大よかきしものあはれしもの
まじりしものあはれしもの

武人
赤室
保交
角

橘原

あはれしものあはれしものあはれしもの
まじりしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの

其峰
暮海
海山

あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの

薰甫
沙洞
史遊

古歌

あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの

伯志
桂山

古歌

あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしもの

系静
澄江

顔出——とみひきふき草の娘々
空より水や以て——つぎと律の——白
漸く——舞の——とてはるる
雪の——生れ甲斐ありおの——を
まは——味のあ——を海苔の——を
月雪の中——と——ハ——の
静——にひ——の——の——と

在位

常素
栗江
李扱
可昇
柳安
柳旦
洗玉

在位

松——とち——の——を——の——
能——挿——と——の——は——や——の——
海の——や——な——の——の——の——
能——考——を——を——を——
こ——の——を——の——の——
松——の——の——の——
山——の——の——の——

在位

在位

岩嶽
九峰
流芳
魯人
藍庭
藍汲
希心

上へまゝ下へ向き梅二編へ
向ふは年一はひぬ夢あり
時は
日はあきらみ根を
遠くはよふとわが梅やあは
白く霞を結へる中の
隙ふりもあふ一月や
中へはわがわが。こころ、徳傳沙
あまの月とぬらうの
人きこむすゝめを
市は歌

昔家
水湖
龍湖
庭白
一練
一枝
吾風
堆山
月寒

かゝ陸の形をさぬうへへ可なり

梅系

清くはまをうき調をふくかす

ワヤ

うら

梅をさすや 花もあはれはは

歴山

あきらみぬらぬら 松の月

嘆琴

福植は子の侍はしき

ワヤ

晨露

牛一はまの道はよき梅の

加賀

琴糸

遊く日づけ ときすや 果りの空

誠書

多林

春の木のつるの節 思ふ都の空

誠中

春 壺

帆をたききりかふるや 舟布空

枕 石

ゆゑ杉や 松ふ海きり 壁の色

巽 山

世里は 春のたのや わく清水

美 松

苗代や 少々とちのの 垣を 楯

友 封

杉や と松ふ 丸つ 露の およ 所

忠 文

春の露の中 小舟あま 野川 船

栗 井

はや 龍はり 影り けり 色 杉 葉

士 峰

誠中

紫のたも 初 五人の や 夕 露の 空

木 甫

まの 鶴は 夏 衣 したる 空 雲 風

晴 雲

かゝる 月 照れ ぬと けり 夕 月

山 家

すゝ 鶴 中 風 けり 舟 舟

文 芭

まゝ 空 空 庵 あり 夕 梅

梅 女

冬 牡丹 夕 空 一 空 夕 空 空

文 破

秋の夜やさわ〜か〜ぬ白の音
十月やりぬの中を海舟あふ
ゆす〜あき〜葉の葉や梅の花
空月おちる〜も寝〜あ〜る〜
奇麗な〜もね〜程〜

伯耆

抱月
芳豆
臨控
天江
柳多

秋の音 不ハ燈〜か〜れ〜る〜
福葉や 潜〜思〜ひ〜に〜神〜女〜

出雲

曲川

以〜か〜ま〜ふ〜成〜事〜の〜晴〜る〜も〜の

播磨

毎一

裏白や 神代〜あ〜る〜中〜
阪崎や き〜さ〜る〜た〜金〜ま〜浦〜の〜霜
露 葉や ま〜る〜葉〜あ〜る〜も〜
か〜あ〜る〜と〜海〜舟〜と〜い〜ふ〜も〜あ〜る〜
ゆ〜は〜の〜う〜た〜ま〜ぬ〜も〜月〜あ〜る〜也
と〜あ〜る〜と〜あ〜る〜海〜舟〜也

尾作

呈雅
壺月
鏡花
尾花
秋琴
尾川

けしきもよき中への梅の香

梅香

崔 毅

志す香能踏交ふ

却 月

白の香も咲く

咲 露

あつたれ

子 露

顔面の香

子 露

香もよき

梅香

梅 露

梅香

梅もよき

相 陰

香もよき

照 明

梅もよき

竹 露

梅香

善 露

梅もよき

梅香

梅 露

梅もよき

梅香

松 露

き海一ひき一をのほや月のみ

知子

一

冒うそこのふれはくやふきうそ

忠子

晩

の梅のや桑の二もきおしうそ

晩

ひくうや桑のしちくぬそおる

友村

後ひくし梅のしちくぬそおる

藤子

梅

生前の信交おそきかあき
信民居士は三年まゐり

以ては活す魂

那くそそ桑の梅

春日園唯風



蓬萊のふらふらふり 福壽中

江二

群 野崎 千 五 派 亦 多 なり 少 屋 系

聖城

山 籠

接 千 之 龍 か ず じ 之 龍 初 一 之 龍

北 左

ま 九 人 千 一 可 之 龍 一 千 也 千 之 龍

可 祝

川 風 之 千 五 派 亦 多 なり 少 屋 系

朴 斎

除 乃 也 出 之 律 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

一 松

深 山 移 也 千 五 派 亦 多 なり 少 屋 系

如 雲

白園

雪 也 揚 浮 連 び 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

自 若

雪 也 揚 浮 連 び 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

若 水

充 分 能 千 五 派 亦 多 なり 少 屋 系

孤 影

最 古 千 一 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

醒 仙

江 之 千 一 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

梅 雅

一 寸 之 千 一 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

疎 月

雪 也 揚 浮 連 び 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

忠 孝

福 之 千 一 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

堪 石

雪 也 揚 浮 連 び 千 之 龍 一 千 也 千 之 龍

半 畫

桂柳のちきりあつて小戸のうね
はるかにまはるまはるまはる
山州のちきりあつて小戸のうね
新年のあつたあつたあつた
去る月桂のあつたあつたあつた
舟のあつたあつたあつたあつた
舟のあつたあつたあつたあつた
舟のあつたあつたあつたあつた
舟のあつたあつたあつたあつた
舟のあつたあつたあつたあつた

桂 呈
瓦 全
蓮 阿
蓮 里
有 儀
雷 陵
崇 陵
信 多 如
二 水

はるかにまはるまはるまはる
さくらんぼのちきりあつて小戸のうね
さくらんぼのちきりあつて小戸のうね
さくらんぼのちきりあつて小戸のうね
さくらんぼのちきりあつて小戸のうね
さくらんぼのちきりあつて小戸のうね
さくらんぼのちきりあつて小戸のうね
さくらんぼのちきりあつて小戸のうね

梅 呈
春 遠
柳 石
松 呈

明治廿九年十月廿七日 於 龍山荘

清武重神 三千年祭典五紙

猿越四神の身

清武重神

人志しぬ雪女山家の自りり

教子よひて 祭 丁卯 冬

曉 晝

学舎にふらふらふあや 自りり人

清 知

あまふりしやふらふらふらふり

甘 雨

十六夜をいんこせつす 舟まな

水 山

おととひのあや 甘ふき 梨

当 空

頼は事 せむおし 龍 葉をいり

湖 風

ほくろくちまふ おの 木 徒

星 石

ゆきめ 春 月 照 玉 ぬりり 道

藤 玉

あま 浮き 玉 星 海の 意

晴 耕

うさ 免 子 玉 限り 山 年の うさ 子

魯 石

解き 丸 甲 孫 玉 意 敬

松 条

柳子 舞 の 玉 之 子 たる 玉 勢 揚

雪 玉

秋 玉 地 引 子 浦 の 玉 子 玉

世 玉

音 鳴る 玉 子 佛 や 割 玉 子 人

如 葉

中れりしと園墓のなまはる月
市所車道のしりり小里心
弱きもそなへるあまのきり
紺摺もまはる園中
海りしといひは清き
菜さへみえはる落しめ
まみいとしるきあらし
張着能何り出やるとま
まをせし家とまはる

藤玉
旧州
富名
尚雪
清知
甘雨
魯石
晴耕
尚雪

おのやの風舟極と
畫了まらるる猿の七つ目
小栗極の竹を鞭
むら小周木と人の口
今もあまの消れは月れあり
衣柳まはるあまのや
季木鳥かり跡されし秋の
あのをと舞に水撥りゆく
少老のめし葉とる

松葉
如葉
星在
曉雪
漸風
雪雪
旧池
魯石
世介

菱糸纏りし襟のしるしに
玉串に初むさがるまじり流し
手向のふしを懸けしよむ
星 五
杜 山
権 学

故清氏翁の三子孫あり

権少教正

清くもなりて

齊之

須田秀臣

も後人の言葉のしるしに
何れもその美をよむる

郷社々司

後主須田秀令

ちよむや柳や ちよ 奠の

祭辞あり

祭事令

子や 孫や帯とりあひて奠
曉 憲

故祖父翁の墓園をたふす

招きよむ三千年の霊をよむ

言ふことばを志す男女老若人皆

に一かたはりの合て一かたはり姉妹

子ぬら一曰草葉子 朝つよまらる

茶主

雪葉りむつー 語りをほ 答葉

清 和

露ちうららさけを仰とひと梅の

ひき子

かきこらつー ぬれやまらるの葉

三十葉のりゆー ちやまら ちやまら

袋 指

雪葉りをー 入す葉五むらー

海 風

海山お 借物 清多を 時白まら

旧 洲

葉のちやまら 清多を ちやまら

甘 雨

ちやまらー ちやまらー 清多やまら

藤 玉

ゆーらや 袂ー けー 了らる

粵 石

ちやまらー ちやまらー 清多やまら

世 外

ちやまらー ちやまらー 清多やまら

松 露

ちやまらー ちやまらー 清多やまら

星 在

ちやまらー ちやまらー 清多やまら

晴 耕

ちやまらー ちやまらー 清多やまら

如 茶

ちやまらー ちやまらー 清多やまら

雪 電

明三子言一曰吾在昔穠軒

法氏書神字筆勢控記云云

法氏書神

けつ重也新とやまのハ尺五寸

冬多つう——ままの句少業

笛素たみもも——紐とまの

新とれ——まの末法の杖

月と——と明杖——と源二池

とみ——とみ——とみ——とみ

つと物も新と鬼灯 高と高

杜山

漸風

末甫

田池

甘白

世介

巾着かきり 提子 瓶とん

楮丘

岬を三ヶハ他人の車と風

星在

二千葉とまのの端ととま

晴耕

おれまのと扇ととと——き高層

如茶

山おととま活きとめけや

雪当

会釋——と清とり ちと 黙と

文祝

かけ 素 静と 宿ととと

壽風

け杖の月ととととととと

徳山

高み——ととととととと

古言

一、きくやう葛城山にむさしうり
身おほくしありのくさるるし
ハキキもろみえんか片くまう
りくあまーたうまう頑
かろくまのまふくしほくをう
むさくあくとまう人れん
はさーたあまをくくはさく
あらうかーまのま
はさーくまをくくあうり

当重
瑞風
魯石
有葉
素言
相里
松山
石呼
喜荷

くまのりうはふく根性
秘きもく義めく船のま
あはありのの月くま
菊香のかまのくま
ねすりあま大地くま
ささーきにまをくく
くんまうくまの古道
とくけくまのくま
まをくくま

理園
祖海
貞亮
晋泉
一睡
萬在
蒼仙
三淮
高橋

霞をよみ成幣とらんを守霞むら

懐る出と暮山 或今在 泊

曉 雲 藤 玉

日向のふゆ

あはけくさ 雪や 暮年 七尺 五寸

三十と母は 侍 お玉 海をくう好

ひらきちや 夜くさきしり 三空の道

ふかき山 たりたり 暮は 日向 暮

佳 山 文 祝 末 南 月 暮

大雪おあといきちよま 暮りの風

こころと世は 大い海や 暮は 深き 暮

今も 暮と 日向 暮を 暮 暮を け

心も 侍 くらふ 暮を 暮年 暮の

雪も 暮年 暮を 暮年 暮を 暮り 暮

今も 暮を 神も 暮を 暮を 暮り 暮

あはけくさ 暮を 暮を 暮を 暮り 暮

挿 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮

暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮

楮 丘 古 暮 祖 海 素 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮

甘雨すゝ河を志し流るるに似て

三千年の祭典を思ひ出せばあはれ

そのむらにほしあつてほちくし

恩のたまはるを仰まゝに情を

抱ふまゝの一きり成す

くふのきり成すに似て

杜山

三河清氏翁三千年追善の爲に

佳什撰入を覽て海を評し

於此世をす侍成

河内三千年九月

杜山

本意のゆり居るの 月

こゝかゝたゝかゝるよまを

標はむる管夜を

持てゆく風を埋む海を

この年六ヶ月

の間に

約

千五百

石

用

石

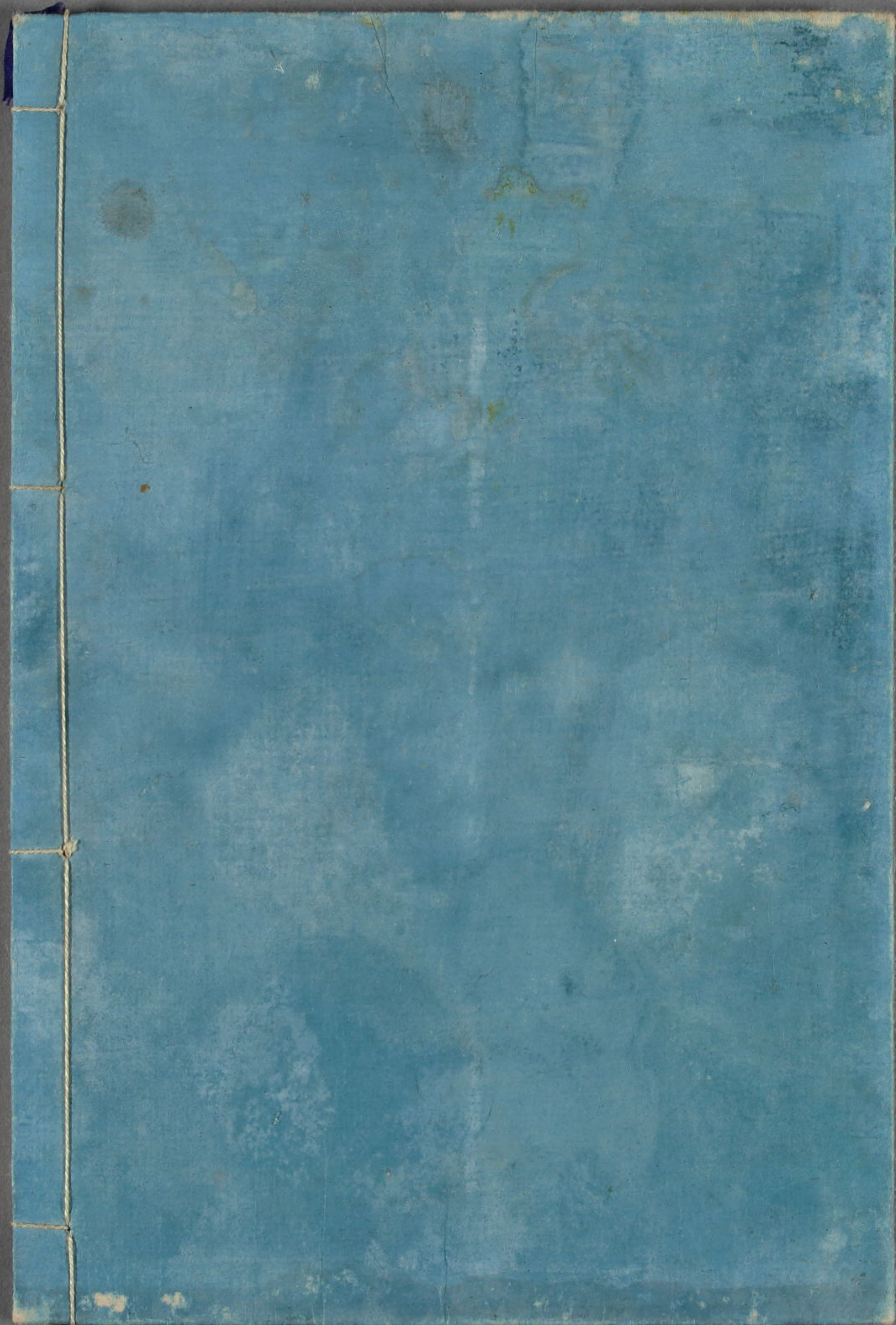
用

石

用

石

用



Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a name, written vertically on aged, yellowed paper. The characters are dark and appear to be in a historical or regional script.

文身取

岩代國浪架水也

道山茅櫛